

入賞

もったいないということ

岩出第二中学校 2年 岩倉 琴音

「もったいない」という言葉は、日本語にしかない表現だと聞いたことがある。物を大切にする心、無駄にすることへの後ろめたさ、そういった感覚が1つの言葉に凝縮されている。この言葉は今や世界に広まりつつあるが、その精神を本当に受け継いでいるのかどうか、私は自分自身のことを振り返ると少し恥ずかしくなることがある。

私が特にもったいないと感じるのは、食べ物を捨てることだ。給食で量が多く残してしまったとき、冷蔵庫の奥で賞味期限が切れてしまった食材を捨てる時、「しまった。」という気持ちになる。母はいつも食べ物を決して無駄にしない。買い物もいつも食材が何が残っているかを考えて買い物をする。幼い頃よく母に、「ごはん粒を残さないように食べるんだよ。一粒の米にも七人の神様がいるから。」と言われた。「食べ物には命があるから粗末にはしてはいけません。」と幼い頃から言われてきた。その言葉が今も心に残っている。日本では毎年、まだ食べられるのに捨てられてしまう食品が大量に出ると聞く。その量は、世界中で飢えに苦しむ人々に向けた食料支援の量に匹敵するとも言われている。一方で世界には、満腹に食事ができない子供達が今もたくさんいる。この現実を知ると何気なく食べ残してしまうことが、どれほど申し訳ないことか感じずにはいられない。

食べ物だけではない。私は「時間」もとてももったいないと感じることがある。特に、何となくスマートフォンをながめて気づいたら一時間が過ぎていたというときだ。動画を見たり、SNSをスクロールしたりしているうちに、あっという間に時間が溶けてしまう。その時間を読書や勉強、あるいは家族や友達との会話に使えばよかったと後悔することが何度もある。時間は取り戻すことはできない。どんなに大切なものよりも、過ぎ去った時間だけは絶対に戻らない。そう考えると、時間を無駄にすることは、あらゆる「もったいない」の中で最も大きなものかもしれない。

また、人の縁でもったいないと覚えることがある。小学生のときに仲良くしていた友達と、中学校に進んで疎遠になってしまった。連絡をしようと思いながら、なんとなく日が過ぎてしまった。勇気を出して一言声をかければ、また仲良くなれたかもしれないのに、そのままになってしまった関係がいくつかある。人との出会いは偶然が重なって生まれるものだ。同じクラスになる確率、同じ学校に通う確率を考えれば、出会いはどれも奇跡のようなものだと思う。その縁を大切にしないことは、本当にもったいないことだと感じている。

「もったいない」という感覚は、物や時間や人を大切にしようとする心の表れだと思う。便利で豊かな時代だからこそ、簡単に手に入るものを簡単に手放してしまいがちだ。しかしその感覚に慣れてしまうと、大切なものの価値に気づけなくなってしまうのではないだろうか。私はこれから、もったいないという感覚を忘れずに生きていきたい。食べ物を残さず食べる、時間を意識して使うこと、そして出会った人との縁を丁寧に育てること。小さな積み重ねが、豊かな毎日とつながっていくと信じている。母がよく言っている。「物を大切にする人は、人も大切にできる。」と。その言葉の意味が少しずつわかってきた気がする。もったいないと感じる心は、目の前にあるものの価値に気づく力だ。その力を磨き続けることが、人として豊かに生きることにつながっていると思う。私は、そう信じている。